
「マラッカ海峡漂流記」

ドリーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「マラッカ海峡漂流記」

【Nコード】

N8068Q

【作者名】

ドリーム

【あらすじ】

舞台はマレーシアの沖、マラッカ海峡からアンダマン海へと続く海賊船に乗っていた男と、海洋調査船に乗っていた男が大竜巻で双方の船が巻き上げられ船は木っ端微塵となる。

皮肉にも二人の男が生き残った。

好むと好まざるに関わらず、生きて陸に上がりたい一心で二人の漂流生活が始まる。

「マラッカ海峡漂流記」 1（前書き）

主人公を外国人にしたのは初めてですが、外国を舞台にしたのは二度目となります。

殆どと言った良いほど、二人だけの物語です。

海賊と海洋調査船の研究者の組み合わせですが、二人の生きて来た道のりが余りにも

違い過ぎるのが、一つの面白さとも思っております。

10回前後の連載を予定しておりますが、場合に拠ってはもう少し続くかも知れません。

皆様の感想をお待ちしております。

大海原は静かな白波を立てている。太陽の光を浴びてキラキラと輝いていた。

マレー半島とスマトラ半島を隔てる海峡をマラッカ海峡と呼ぶ。マラッカ海峡は幅は約70km～250kmの海峡である。

南シナ海とアンダマン海を結ぶ主要航路で、年間の通過船舶数は5万隻を超える。

そのマラッカ海峡を真夜中にさ迷う一艘のイカダが潮に流されていた。

二人とも海には詳しいが、それだけに焦りを感じていた。

すぐに何処か近い島か陸に辿り着くと思っていた。どう云う訳か潮の流れが速くマラッカ海峡を

抜けてアンダマン海の大海原に入ろうとしていた。不味い事に漂流した時刻はマラッカ海峡付近

で真夜中だった。いくら船の往来が多いマラッカ海峡でも、どの船も気づいてくれなかった。

もつともこんな小さなイカダではどの船も気づくはずもない

その大海原に粗末な材木などで組み合わせたイカダに、二人が乗って漂流している。

幸い海は穏やかだが、二人の間では一触即発状態にあった。

一人は屈強そうな30歳前後と思われる男。もう一人はその男と比較すると見劣りするが知的な

感じで学者風にも見える。年齢も屈強そうな男とそう変わらないように見える。

屈強そうな男は恐らく身長190センチ、体重90キロくらいだろう。顔も見るからに怖い感じだ。

しかも筋肉隆々で竜の刺青が数ヶ所に彫られている。

学者風の男は180センチ、75キロくらいだろうか。まあ大きい方だが、やはり見劣りする。

だが学者風な男は怯んだ様子はみられない。何か秘めたものを持っているようだ。

その二人がイカダの上で対角線上に座っている。イカダの大きさは8畳ほどの大きさがあり長方形になっている。遭難した船からロープや材木を拾い上げロープで繋ぎ合わせたものだ。

この二人は知り合いでもなんでもない。それどころか敵対関係である。

マラッカ海峡は言わずと知れた海賊で有名な海峡であり、今も昔も海賊は存在している。

その屈強そうな男の方が海賊船に乗っていた。言わずと知れたマラッカ海賊である。

だが神は悪戯したのだろうか、試練を与えたのか二人は何故か同じイカダに乗っている。

今は敵も味方もない。生きる為に仕方がなく一緒にイカダに乗っているだけだ。

二人は沈没した船から、漂流している物を片っ端から拾い上げてイカダに積み揚げた。

いつまで漂流が続くか分からないが、その為には出来る限りの物をイカダに揚げる事だった。

何も二人は協力している訳ではない。隙あらば殺して自分だけ助かろうと思っている。

いやそう思っているのは屈強そうな海賊の男だけかも知れない。

つづく

「おい、お前！ 殺されなくなかったら俺の支持に従え、奴隷のようにな」

そう口走ったのは屈強そうな男だ。腕に彫った刺青を腕に誇らしげに見せて威嚇する。

まるでプロレスラーのような体格だ。顔は面長だが獲物を狙う狼のような目つきだ。

「……………」

「ふん、俺が怖くて口も聞けんのか」

「偉そうに言うな。お前の仲間はみんな死んだ。残ったのは俺達二人だけだ。俺を殺せば

お前一人では生きて行けないぞ。俺は覚悟を決めている殺れるものならやってみるよ。それとも協力し合って助けに来る船に拾われるかだ。だがそれもアテにならないぞ」

海賊の男は黙った。その男の言う通りだからだ。めげもせず海賊男に追い討ちをかける。

「おまえ等に天罰が下ったのだ。海洋調査船を襲った海賊に神はお怒りになったのだ。何人

乗っていたか知らないが海賊で残ったのは、お前だけじゃないか」

「ほう、この俺に説教がましい事を言うとはいい度胸だ。だがそれはお前達も同じだろう。お前

達乗組員は何人いた？ 残ったのはお前だけだろう神は平等なのだ。ワッハハハ」

「何が平等だ。海賊に神は居ない。お前達だって船を失って何も出来やしないじゃないか」

二人がどうしてイカダに乗っているかと云うと、海賊船が海洋調

査船を襲つて来た時だ。

上空が急に真っ暗になり、大きな竜巻が海賊船と海洋調査船もろとも呑み込んだのだ。

船は一旦高く巻き上げられ、そのまま海に落下して一瞬にして双方の船が木っ端微塵となった。

海洋調査船の乗組員である男は、その寸前に危険を感じて海に飛び込んだ。

それで一人だけ一命をとりとめた。たぶん海賊男も似たようなものだろう。

その結果、皮肉にも海賊船の一人と調査船々員一人が漂流している板に？まって助かった。

つづく

「マラッカ海峡漂流記」 3 (前書き)

「ふん、理屈は結構だ。仕方がない此処は力を合わせるしかなさそうだ。お前、名前は？」

「俺はボレー・モレノだ。国はマレーシアだが祖父はアメリカ人だ。お前は？」

「俺様か？ レヴィアタン・フランコだ」

レヴィアタンとは海の怪物とか悪魔、時には守り神、或いは海の竜とも云われている。

「冗談はやめてくれ。日常は人の姿で過ごし、海の潮を動かす時のみ巨大な竜に変化して

全身を使って海流を掻き出す竜の名前じゃないか。七つの海の守り神とか海の悪魔と云われる」

「そうだ。親父が付けた名前だ。親父からレヴィアタン伝説を聞いて気に言っている」

それから二人は互いに警戒しながらも、生抜く為に協力し合った。そんな中、イカダの中央に積まれた荷物を調べ始めた。

竜巻で叩きつけられた双方の船は木っ端微塵になり一瞬にして即死した者や、重症を負って

そのまま海の底に沈んで行った者。気がついたら二人だけだった。

船の残骸が周辺に散らばっていた物を次々と拾い上げたのだ。

互いに仕事こそ天地の差があるものの、海を仕事場とする男は咄嗟に判断したのだ。

少しでもいい何でもいい、食料や材木があれば生き望みへと繋がる。だから何を拾い揚げたか分からない。しかしこれが海の上で生きて行く為の全てだ。

幌の切れ端、浮き輪、ロープ、鍋、フライパン、釣り糸、工具箱、

ビニールシート、缶詰が10数個

、水の入ったペットボトル、大きなガラスボール（浮き球とも呼ぶ）ざっと簡単に見たらそんなものだった。それにしても良くこんな拾い上げたものだ。

船の往来が多い、ここマラッカ海峡は昔から海賊のメッカだ。

ここを通る船は対策として武器を積み込んでいる。因って海賊達も乗組員の多い船は襲わないのが通例だ。それで小型の調査船が襲われた訳だ。

昼は照りつける太陽で喉が渇く。6本のペットボトル10数個の缶詰では数日しか持たないだろう。

その間に此処を船が通るかは予測不能だ。ましてイカダでは近くを通っても発見されにくい。

飲み水は一日1本として二人で3日生き延びられる。殺人を犯して一人でも3日長くなるだけだ。

だからフランコが襲うことも考えにくい。二人は破けた幌を繋ぎ合わせて、日除け用のテント

代わりにした。とにかく今は暑さと体のエネルギーの消耗を防ぐ為に二人は眠った。

つづく

どれだけ流されたのか一向に分からない。運が悪いのか航行する船も見当たらない。そして

2日目の朝の日差しがイカダを照りつける。気温はどんどん上昇して行き、水を飲まずには居られない状況だ。たまらずフランコがペットボトルに手を掛けた。

すかさず、モレノは口を出した。

「おい！ 我慢しろよ。でないと水は2日どころか1日で無くなるぜ」

「うるさい！ お前なんか指図される覚えはない。竜巻さえ無かったらお前は殺されていた身だぞ。それとも此処で殺してやってもいいぜ」

「ふん、まだ海賊のつもりで居るのか。今は一人だ。それも武器がなくて勝てるのか？」

「なんだと！ その貧弱な体で俺様に勝てると思っているのか」

「貧弱かどうか、やって見なくては分からんぞ。俺だって空手をやっていたんだ。一対一なら

自信がある。それでもいいのか」

フランコは空手と聞いて一瞬ひるんだが、体格は圧倒的に有利だ。ハツタリを掛けていると

思った。ここで優位に立たなくては主導権が握れなくなると思ったのかフランコは立ち上がった。

「よせ！ 無駄に体力を使ったら水や食糧がもつと欲しくなる。やめておけ」

「やつぱりハツタリか。ふん、お前が居なくなれば水も缶詰も俺のものだ」

「一人で何日持つのだ。二人なら色々とし恵も回るぞ。良く考えろ」

しかしフランコは聞く耳を持たなかった。一気に突っ込んで足にタックルを仕掛けて来た。

だがタックルする筈の両足はなく顔面に膝蹴りを喰らった。ハツタリではなかったようだ。

フランコは怯まずに立ち上がるつもりだったが、今度は顎を蹴られてもんどりうって倒れた。

「分かっただろう。外見だけで判断するなよ。一人の海賊で何が出来るんだ。やめる！」

フランコにとって初めての恥辱だった。海賊船の中でもNO3なのに歯が立たない。

互いに距離を置いて最初の頃のようにイカダの両端に座った。しかし太陽は容赦なく照りつける。

唇はカサカサになり皮膚が乾いて唇にヒビが入って来た。

あの大竜巻以来、大海原は穏やかで波も静かだ。天気が良すぎて灼熱の太陽が襲う。

雨が降れば全てが解決するが、もう待つてはられない。フランコは夜になるのを待った。

敵対する相手同士だ。眠りも当然浅くなり二人とも寝不足状態が続いていた。

警戒しながらモレノは眠った。ほんの一瞬深い眠りが不覚をとる羽目になった。

フランコが忍び寄るのに気づかなかった。

モレノがいびきを掻いているのを見て、フランコは再び襲い掛かった。奇襲が成功した。

モレノを殴りつけペットボトルを奪った。不意を突かれたとはいえモレノは抵抗しなかった。

残りは2本。2本共フランコが奪った。そして一気に1本のボトルを半分ほど飲んだ。

月夜に照らされたモレノの顔は、フランコを哀れみの目でみる。

「どうしたモレノ。衰弱して動けなくなったのか。ざまあみる死ぬのはお前が先だ」

「……ではお前が後ということかフランコ？ 二日くらい後にはお前も死ぬんだぞ。それも分らないのか？ 最後までいい人の心を持ってよ」

「何を言つてやがる。幼い時から海賊一家で育つたんだ。人の物を盗るのが仕事だ」

勝ち誇つたように吼えるフランコに、モレノは穏やかに話した。

「じゃあ教えてやるう。俺は真水の作り方を知っている。伊達に海洋調査をやっていない」

「本当かよ？ なら何故最初から言わないんだ」

「最初に言つただらう。狭いイカダに二人だけだ。大海原で生きて行くには協力が必要だと」

「そんな事を言つて、ペットボトルの水が欲しいんだらう」

「そりゃあ欲しいさ。でも此処では信頼関係を築くことが本当に生きる道だ」

暫らくフランコは考えていた。人から奪い取ることしか知らないフランコが……。

「よーし分かった。お前に賭けてみるか。だがな、裏切つたら必ず殺すぞ」

そう言つてフランコは残り一本の、ペットボトルをモレノに放つた。

つづく

「マラッカ海峡漂流記」 5 (前書き)

その水の入ったボトルを受け取り、ひび割れかけた唇に水を運んだ。四分一ほど飲むのと

モレノはニツコリ笑って、ありがとうフランコと言った。

なんだか知らないが、フランコは（ありがとう）の言葉が胸にズキンと響いた。

人に憎まれる事には慣れているが、ありがとう？ 妙な感じがしたのだ。

なんだ。この感触は？ 人から怒鳴られても感謝された事がなかったフランコは驚く。

フランコは照れくさそうに薄笑いを浮かべ、ありがとうの返礼の代わりに軽く手をあげた。

その夜は互いグツスリと眠った。その前までは互いに警戒して熟睡が出来なかったのだ。

今日で3日目の朝を迎えた。4日持たせる予定の水も互いに一本のボトルの水が半分程度になっっている。この暑さではどう節約しても夕方から明朝には無くなるだろう。

だがモレノが言った言葉は互いの信頼を少しだが芽生えていた。

正確には一人ではどうにもならないと言う事だが。

時間はたっぷりある。互いに睨み合っているのは精神的に疲れが溜まるだけだ。

モレノは何気なく聞いてみた。

「フランコ。君はなんで海賊になったんだ。他に道はいくらでもあつたらうに」

「別に好きでなった訳じゃない。俺は親父と二人だけで育った。

お袋は病で亡くなり親父は幼い俺を舟に乗せて漁師の仕事をしていた。そんな時に時化しほに合い二人とも舟から放り出さ

れた。親父は潮に流され分からなくなった。俺は親父がいつも付けてくれていた浮き袋のお陰で

沈まず漂流している所を、海賊船に助けられた。それからは船長が親代りとなって育ててくれた。

当然の成り行きで俺は海賊になったのさ」

「そうか……選ぶ自由がなかった訳だな」

「いや俺は満足している。海賊は良い事じゃないが俺の天命さ。

ただ船長始め仲間が居なくなった。仕方が無いこれも天命だ。で、お前は？」

「俺か、俺はお前には悪いが大学にも入れて、憧れていた海洋船にも乗る事が手来た。妻も

居るし子供も二人いる」

「そうか恵まれた人間も居るものだな。だが俺は俺で幸せだった。仲間と一緒にまではな」

「ならば互いに、数日前まで一緒だった仲間の冥福を祈ろう」

二人はかなり打ち解けて来たようだ。しかし生き延びる術を考えなくてはならない。

「フランコ手伝ってくれないか、今から水を作る道具を作る」

「ほっ本当にそんな物が出来るのか？」

「ああ、イカダに残っている物で作れると確信していたんだ。信用しろよ」

フランコは最初から半信半疑だった。しかし今はモレノを信じるしかない。生きる道はそれしか

残されていなかった。こんな状況に追い込まれても不思議と気持ち
が安らぐのがフランコには

不思議でならなかった。

「じゃあフランコ、その幌の切れ端をこんな風に切ってくれ」

その間にモレノはガラスボールに工夫を加えて、太陽光線を集められる即席のレンズを作り、
更にガラスボールに穴を開けて、そこに海水を入れる。これで海水が沸き立つはずだ。

幌を扇型に切り取り内側にビニールを貼り付けた。これで、ろ過装置の完成だ。

ガラスボールで作ったレンズが、海水を入れたガラスボールに反射させて蒸気を出すとその

蒸気をビニールシートが受け止めて、その雫が真水となりペットボトルに取り込むと完成だ。

だが一つの装置では一日掛けて出来るのは、真水がペットボトルに一本分程度だ。

つづく

「マラッカ海峡漂流記」 6 (前書き)

これを二つ作った。つまり一人1日、2リッターのペットボトル一本飲める計算だ。

フランコは感動した。海の水が真水になったのだ。

「お前、凄いな。何処で覚えたんだ」

「海洋調査船に乗るには海洋学を学ばないとならないんだ、その過程で覚えた。真水の作り方

は他にもあつて、ここでは無理だが海水を凍らせると氷になるが、塩分は中央にだけ集まり分離

するんだ。外側が塩分のない氷となるのだ。その氷を剥ぎ取り溶かせば真水になるんだ」

フランコは驚きを隠せなかった。人の物を取る仕事に誇りを持っていたものが崩れ始めた。

海賊船では強い者が優先的に何でも出来た。海賊には優しさは必要が無い。あるのは常に

強い者に権利がある。それが海賊の掟のようなものだった。

まさに太陽熱を逆手に取った手法は功を奏した。これで水の心配は解消された。

しかし缶詰も底が付き掛けた。今度は海賊生活の知恵をフランコが発揮した。

海賊は海を生きる糧としている。魚を獲るのもその得意分野のひとつだ。

ましてや父が漁師だったので魚を獲る事に関しては他の海賊仲間より群を抜いていた。釣り糸を

利用して魚を獲った。丸太とガラス球を割ってモリを作り潜って魚も獲った。二人は生きる為の

知恵をいかに発揮した。そんな日々がやがて二週間続き、その

間に二人は色々な話を話した。

愛情の代わりに人から奪うことしか教わらなかったフランコ。愛情、友情なんて皆無だった。

それがいま変化しつつある。それをモレノが教えてくれた。

二人には友情が芽生え始めていたが、しかもう漂流して二週間、焦りも出て来た。

フランコは思った。モレノの云うとおり自分が一人だったら今頃どうなっていたのか、改めて

殺しあわなくて良かったと思っている。例え水と食料が1ヶ月分あったとしても一人では話し相手

も居ないし、いつまでも続くか分からない漂流生活ではいずれ水も食料も尽きてしまう。

今はなんとか水と食料は海から獲ることが出来るのだ。

そんな安堵している所へ、再び暗雲が漂い始めた。真つ青な空が暑い雲で覆われ始めた。

ただ雨なら大歓迎だが、嵐の予感が現実のものとなってきた。

つづく

「フランコ嫌な雲行きだろなあ、イカダをしっかり結び付け。流されないようにイカダの上の物をシートで多いロープで縛ろうか」

「それもそうだが、俺達が流されたらお陀仏だぜ。とにかくイカデは舵取りも効かない。準備だけはやって置こうぜ」

それから1時間が過ぎ海面が荒れだした。風邪も強くなりスコールのような雨が降り注ぐ。

こんな状態でなかったらシャワー代わりになったのにとフランコが嘆く。

次第に波が大きくなった。イカダは大きく浮き上がり、高波に流され急上昇急降下を繰り返した。

二人は救命浮き輪を付け、更に体をロープで縛ってイカダに腹ばい状態で凌いでいた。

だがイカダが軋む度にモレノのロープが緩み、イカダから落ちてしまった。

「おーい！ モレノ！！」

フランコは叫ぶと同時にロープを自分の胴に括りつけた。だが流されて行くモレノまでは届かない

テントで覆っていたロープに自分を繋いでいるロープに足して救命浮き輪をモレノに向かって

投げた。たが荒れる波でまったく届かなかった。

フランコは最後の手段に出た。荒れ狂う海に飛び込んだ。死ぬかもしれない、そんな事考える

余裕もなかった。ただ助けなくては。

まだ幸いな事に昼下がりで、アップアップしているモレノが時お

り波の合間から見える。

それを頼りにフランコは必死に泳ぐ、しかも強靱な力で荒れ狂う波なのに確実にモレノに近づいて行った。そしてついにモレノに辿り着く。

モレノは半分意識が遠のいていた。同じ海の男でも船の上で仕事するモレノと、海を自在に泳ぎ

潜り、時には海の上で殺し合いもして来た海賊のフランコは、正に海の竜そのものだ。

親が付けたと云うレヴィアタンは、守り神となって姿を現したようだ。

そのレヴィアタン・フランコは自分の側にモレノのロープを繋ぎ、イタガと繋がっているロープを手繰りながら徐々にイカダに近づいて行く。

フランコの強靱な体力が、完全レヴィアタン伝説の竜が乗り移ったようだった。

人は時に想像が付かない程の力を発揮するという。それが幸いして窮地を脱した。

15分後、二人はイカダの上に居た。皮肉な事に嵐は急激に過ぎ去って行った。

「俺は……生きているのか？」

モレノは殆ど意識が飛んでいたが、なんとか目覚めたようだ。

「おう、どうだ。地獄から這い上がった気分は」

フランコが冗談まじりで声を掛けた。

「フランコ……君が助けてくれたのか？　ありがとう」

ありがとこの言葉、これで二度目だ。くすぐったい様な妙な気分だが心が温まる言葉だった。

「感謝される事じゃないよ。お前が居ないと俺も生きられないからな」

「フランコ、俺達は神に守られているのか？ あの竜巻で船がバラバラになっても今回の嵐でも
そして二週間経つのにまだこうして生きていられる」

「ハツハ八それを云うなら悪運だろう。いやお前は神のご加護
だろうがな」

「確かにな」

モレノはそう言いながら胸の前で十字を切った。それを見た
フランコは。

「モレノ。お前クリスチャンか。てっきりイスラム教だと思っ
ていたよ」

「祖父がアメリカ人だからな。フランコは？」

「特にない。それと食べ物制限される宗教は好まん。俺には
レヴィアタンという神が居る」

「ハツハ八間違いない。フランコは神だ。俺はその神に助けら
れた」

二人は大声を出して笑った。こんな笑いは二人にとって、いつ
以来のことだろう。

生きていた事に喜びを感じた二人だったが、それも束の間、イ
カダにあった物は全て流されて

いた。水も食料も日除けのテントも何もかも消えてしまった。

モレノは溜め息をついた。もう真水を作る道具も魚を獲る釣り糸
もない。照り付ける灼熱の太陽が

二人の体力と水分を奪い。生きる術が費やしてしまった。

「いやまだ諦めるのは早い。この嵐でイガタの物は流れたが漂流
物が何処に浮かんでいるかも

知れない。諦めずに探そう」

モレノはフランコを励ますように言ったものの、果たしてそんな
漂流物があるのか不安であった。

するとフランコはニヤツと笑った。フランコの腰にはまだロープが巻きつけられていた。

「俺の名はレヴィアタんだ。海の悪魔にもなるし海の神にもなれる。ホラ見ろ」

フランコはロープを少しずつ引いた。すると海の中から小さく折りたたんだ袋が現れた。

袋の中にはガラスボールを浮き代わりに入っており、袋の中にはペットボトルが二本入っていた。

「フランコいつの間に？ 凄いな」

「まあなイカダに戻っても水がないと生きられないからな。しかしこれでは一日で無くなるが」

「いや、まだ生きられる。希望はあるさ」

その日から二日目の朝を迎えた。すでにペットボトルの水は殆どなかった。

「どうやら最後の時が来たようだなモレノ。お前に会えて良かったぜ。今度生まれた時はモレノ

俺の友達になつてくれよな」

「ああ、ただの友達じゃない最高の親友として迎えるよ」

漂流してから18日だった。もう最後の運も尽きてしまった。あとは天命に任せるだけだ。

そんな時だ。ドツドツとエンジンの音が聞こえて来た。

小型漁船が近づいて来るのが分かった。二人は起き上がるのもやつの状態だったがこの時

ばかりはバネ仕掛けのように飛び上がり漁船に向かって手を振った。すると漁船から汽笛が何度も鳴り、ライトが点滅していた。救われた。二人は抱き合って喜んだ。

二人は奇跡の生還を遂げたのだ。モレノは喜んだ。家族に会える嬉しくて堪らない。

もう死んだと思っっているかも知れない。だから漁船員に頼んで無線を打ってもらった。

だがフランコは上陸するのを拒んだ。このまま逮捕されるんじゃないかと恐れたのだ。

モレノは助かった事が嬉しく、一瞬フランコの処遇まで頭に浮かん

でいなかった。

フランコは海賊だ。陸に上がれば色々追求され裁判に掛けられ服役する事になるだろう。

それだけは避けなくてはならない。襲う側と襲われる側、18日前は確かにそうだった。

今は違う命の恩人でもあり友情を誓いあった仲だ。なんとしても助けたかった。

「心配するなフランコ。今ではお前は大事な友人だ。幸い誰もお前が海賊だと知らない竜巻に巻き込まれ、一緒に漂流していたと言えば誤魔化せる。俺を信じろ」フランコは信じるも何も、それしか方法はなかった。ここでもモレノに賭ける事にした。

幸い助けしてくれた船は20トンクラスの小さな漁船で、細かい事は追及しなかった。

モレノは海洋調査船に乗っていて遭難したと本当の事を告げた。

もう一人の男は調査船に現地で、臨時に雇った雑用係りの男だとなんとか誤魔化した。

ともかく二人は陸に上がったが、騒ぎを恐れて小さな漁村に船を着けてもらった。

ここではフランコだけ降りて貰った。まもなくモレノの親戚の者が迎えにくるから数日そこで待っていてくれと伝えて。

つづく（次回最終話）

「マラッカ海峡漂流記」 8 (後書き)

次回最終回となります。

「マラッカ海峡漂流記」 最終話（前書き）

つたない小説を最後まで読んで頂きありがとうございます。やっと最終回まで書く事が出来ました。

「マラツカ海峡漂流記」 最終話

そこから漁船は本来の目的地である港町に向かった。

出迎えたのは海洋調査船の重役と職員が数人とモレノの家族だけだ。調査船側も騒がれるのを嫌った。漂流者が一人助かったが大勢の死者を出した責任が、また

蒸す返されては堪らないからだ。この点ではモレノに取っても好都合であった。

もちろん漁船の船長には内密に、それ相当のお礼が調査船側から支払われた。

それよりも何よりも妻と子供達に会いたかった。

モレノのは重役への挨拶もそこそこに、妻と子供の側に駆け寄り抱き合って喜んだ。

モレノは海洋調査船に乗ってから二ヶ月、夢にまで見た家族の再会を喜んだ。

その日の夜、妻に遭難して助かった理由を話した。もちろんフランコは命の恩人であることも。

翌日の朝、親戚の家へ行った。親戚の人々は良く助かったと喜んでくれた。

ここでもフランコが命の恩人である事を話して、相談に乗って欲しいと頼んだ。

フランコはどうも勝手が違うのか、大きな体を持て余していた。

フランコは不安でいっぱいだ。海賊の仲間はいない。これからどう生きるのかと。

「フランコ心配するなって、俺たちは生死を共にした仲間じゃないか。俺にまかせろ」

フランコを連れてモレノの家に向かった。妻にも子供にもフランコ

を紹介した。

モレノは自分の家にフランコを招き入れた。フランコにしてみれば浦島太郎の世界である。

今まで家族は海賊の仲間あり、親といえは海賊の船長であった。そこは弱肉強食の世界で、強い者が欲しい物を手に入れるのが当然であった。

油断をしたら総てを失う。しかしここは違った。モレノの妻や子供は暖かく迎えてくれた。

最初は違和感があったフランコだが、しかしもう海賊には戻れない。人の物を盗つたら、人を殴つたら警察に逮捕される。海賊をやっていた頃は強い者が法律で

あった。しかし此処は違う。規律と道徳と人を思いやる事が生きる幸せに繋がる。

そんな事をモレノはフランコに言い聞かせた。人に親切にすれば親切が返ってくる。

それからモレノはフランコの為に、近くにある空き家を探して住まいを与え仕事を与えた。

モレノは海洋調査船を家族の為にフランコの為に降りた。今は海洋研究所で働いている。

また別な海賊船に襲われてはたまらないからだ。そしてフランコを幸せにする責任がある。

フランコは海賊生活が長いから、人の付き合い方を側で教えてやった。

体力には自信があるフランコは港の市場で働いた。あとの心配は職場関係だった。

しかしフランコはモレノの教えを守った。(人に親切にすれば親切が返ってくる)

(逆に怒りをぶつければ怒りが返ってくる)その通りだった。

人の親切に熱い物を感じたフランコは、その親切を返した。働く喜

びと人の情を知った。

フランコは生まれ変わった。愛情と友情というものがどんなに素晴らしい事かも知った。

やがて二年の月日が流れた。今フランコは小さな漁船を買って漁師になつていた。

あの海賊の荒々しい気性は消えて真面目に働いた。

最初の頃は巨漢で人相も悪く、人々は警戒したものだ。だが今は相手から言い寄ってくる。

そして今、モレノの隣に新しい家を建てて妻をめとり、互に兄弟のように暮らしている。

「よーフランコ産まれそうだって。いいのかい仕事どこじゃないだらう」

「なあに心配いらなくてモレノ、お前さんの奥さんが側に着いているから」

「なるほどフランコの奥さんと、家のカミさん仲がいいからな。生まれたらパーティーを派手に

やるうぜ」

二人は声を上げて笑った。

了

「マラッカ海峡漂流記」 最終話（後書き）

読んで戴いた方々にお礼を申し上げます。

この小説に対して感想または、ご意見を賜れば幸いです。

次回作品は何時になるか分かりませんが、何時の日か折を見て投稿したいと思います。

尚、私は大の巨人ファンであり、三月の声と共に巨人144試合を最初から最後まで観戦しております。巨人ファン万歳（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8068q/>

「マラッカ海峡漂流記」

2011年4月11日16時59分発行